

の前進が見られ、また、昭和54年に完成した三保防波堤の建設によって港内側に発達したトンボ口付近では年々浜幅が延び約70mの浜幅となった。一方、今まで年々延びていた三保真崎の先端部は浜の後退が見られるようになった。しかし、他の汀線は昭和54年の汀線と殆ど同じ浜幅で変化していない状態にある。

3. 静岡・清水海岸の土量変化

図-4は、昭和54年を基準として昭和62年までの土量の変化を示したものである。昭和58以降から昭和62年では安倍川から大谷川の区間で約35万 m^3 から55万 m^3 の土砂の堆積が見られる。この区間で多量の土砂堆積を見たのは、土砂採取量を規制したこと、被災後の復旧護岸形状（浸透性のり面）による相乗作用による効果と思われる。他の区間では海岸整備による効果によって一部の区間で土砂の堆積が見られた箇所もあるが全体として浜は侵食の傾向にある。これらの海浜変形過程を見ると大谷川から安倍川の区間で多くの土砂堆積があったため大谷川から東側への土砂の補給が少ないためと考えられる。この影響は清水海岸にも及んでいる。

図-5は昭和58年を基準として、昭和62年までの土量の変化を示したものである。昭和58年と昭和62年の土量を比較すると蛇塚から駒越の区間では約50万 m^3 程度の土砂が侵食されたことを示し駒越から三保松原までの区間では約55万 m^3 程度の土砂の堆積が見られる。この蛇塚から駒越の区間の土砂が速い速度で東側に移動した形となり、清水海岸におけるこの傾向は東側に速い速度で侵食が進むことを示唆している。

これらの土砂移動の現象は、駿河湾に來襲する波浪の例として波向SSW、周期12秒の波が当海岸に入射した様子を図-1に示したが、屈折図から見ると海岸の西側から東側に向かう沿岸流を発生する形となって、安倍川河口から流出した土砂は東の方向にたえず移動するためと考えられる。

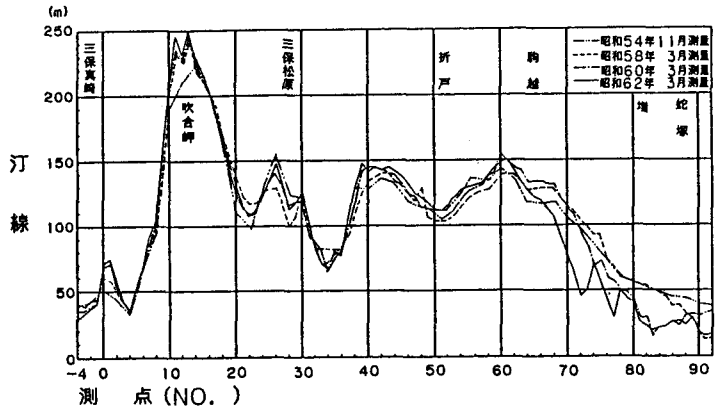


図-3 清水海岸の汀線変化

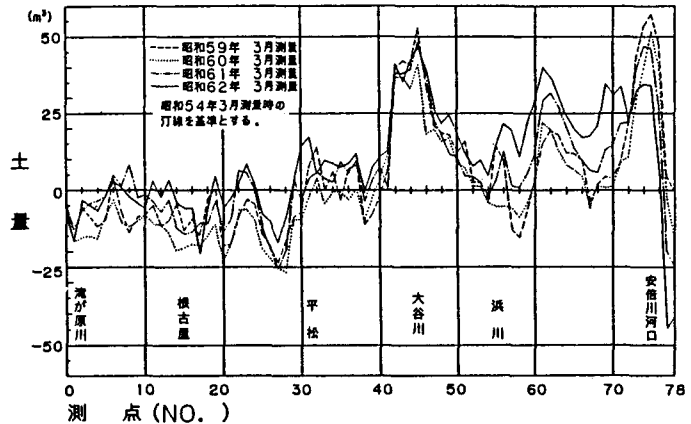


図-4 静岡海岸の土量変化

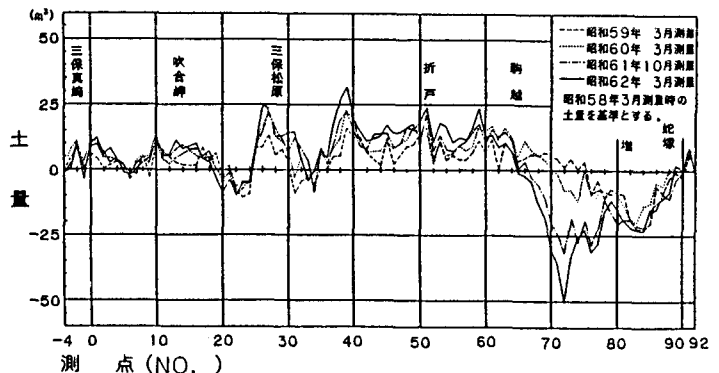


図-5 清水海岸の土量変化